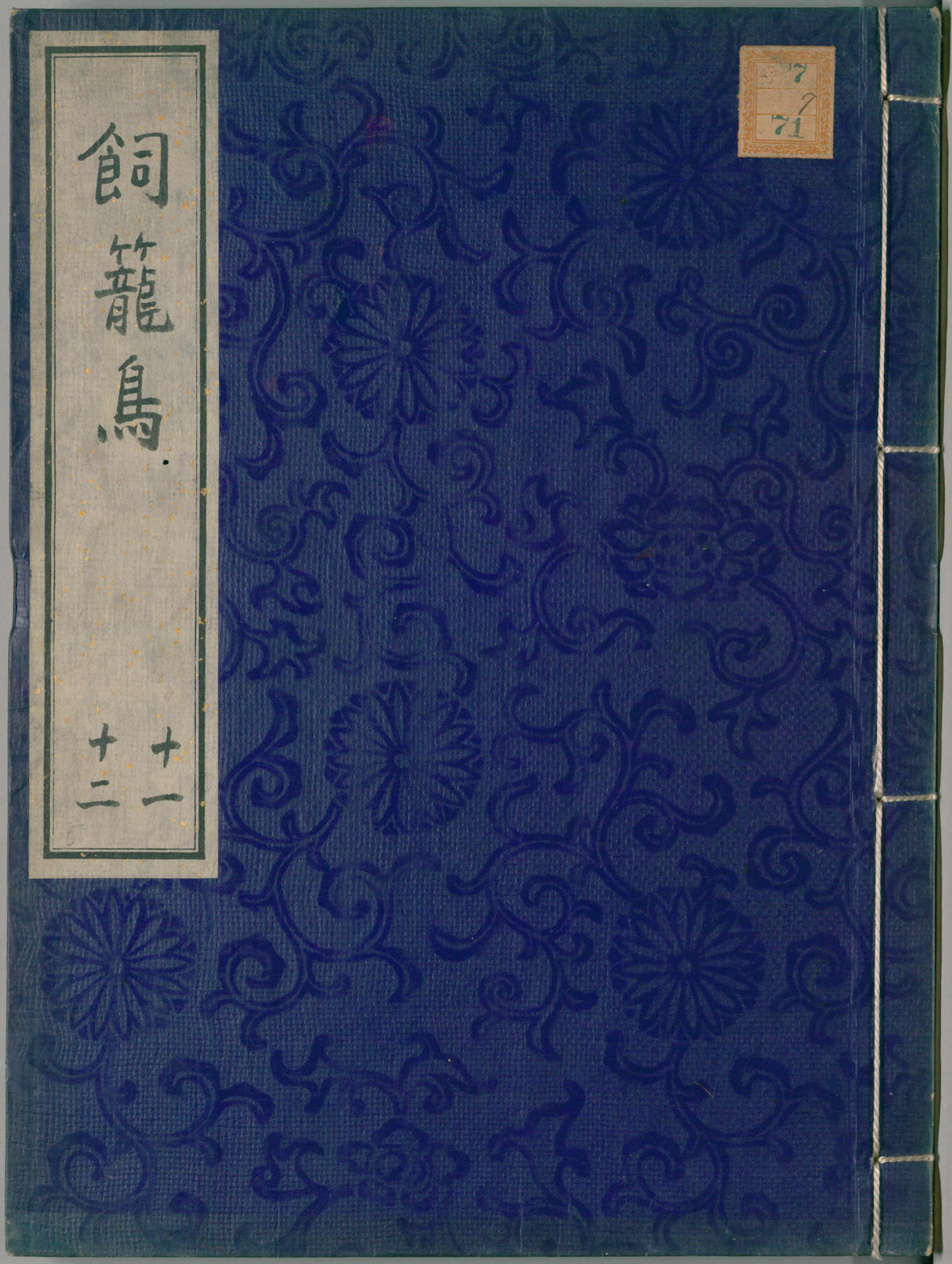
飼籠鳥

十一
十二

7
7
71



国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

特別 特7-71

帝國圖書館藏書

伊藤長胤記

佐藤成裕著

飼籠鳥

巻之十一
巻之十二

昭和三年一月

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

飼籠鳥諸雀部目録第十一巻

滕成裕曰頰白頰赤の類山林草澤其中に産して人見我養ふに粒食を以てし農食を以て活を周易して人に能く馴染するを以て能く玩覧に供ず其時も亦玩聴に於たんとする物之

提壺蘆 典籍便覽　白頰白　黄頰白

黒頰白　深山頰白　島頰白

頰赤　深山松尖　頭高

島頭　白頭　蒿雀 本草拾遺

黒鵐　小黒鵐　島鵐

野地子　島野地子　岩雀

濱雀　大珠林　小珠林

小揚　金腹　朱砂鳥

茅潜過　剖葦 爾雅　雪下

先入　河淡鳥　文鳥

頰黒　容莢 中山傳信録　大嘯

黒嘯　頰赤　鴆 鉄崖集

比伊智伊　交喙 農田餘話　青伊須加

鳥伊須加　白喙鳥 陸詞切韻　嘬嘴 南産志

島嚨脂

四十三品

飼籠鳥諸雀部目録 終

飼籠鳥卷之十一

諸雀部 四十三種

提壺蘆 典籍便覽 一名石求讀 傳信録 提壺鳥 西湖志

番名

和名 シト、 九州方言 ホウシロ 江戸

諸州共に多し本朝食鑑に云く狀雀より大にして灰赤色眉白く盡れなく頰も亦々白眉小黑く背上に黑斑あり翅尾略黑く尾九両端に白毛あり腹微黄白臆下赤斑あり黑觜黄結を声圓滑多く鳴る小鈴を振る声我為を又ちゝんと鳴を宵鈴と名付又ちゝこ鳴くちゝこと云かめきこの鳥諸鈴と云を鳴も色々あり又一筆鳴上せし鳥と

畫眉鳥ハ全ク舶來ナリ

典籍便覽曰提壺蘆形如燕色閒黃褐春日則啼曰提壺蘆沽美酒此說ヲ好ムニ

白頰白

諸州往々アル諸鳥ヨリ中白小ニシテ多シ

頰白小ニシテ三ツ羽雪白形ハ雀ノ如シ

又頭上白キハ錦帽子ト稱シ冬時ハ往々ミル皆此

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

白きがり又尾先は白きがり又白点がりこれを
蓉石と云ふ嘴は皆同し
西湖志曰提壺咸淳臨安志和靖過下湖別野
詩多謝提壺鳥留人到落暉　是なり

黄頰白

諸州共に希に出る事なりしも色河原鶸のことし
全身深黄なるはなし　其此常かに全身全黄なる
その物と云志られども毬を強る時にも色大に
減ずる事なり　野中にて毬を強るは蓋こそ色が
増に劣れ是故に黄色は白色より出て補り
うまし

黒頰白

先年九州にて人の飼ひたるをみる事なり　容貌
強く黒蒿雀はめし　頭上は乃チ頰白なり　是もまた
黒鶫はめく黒質なれは尤も珍重すべし

深山頰白

先年紀州熊野は山中にてみる時は狗大に且又
志黒なり　是乃チ大坂の飼鳥家へ出る大狗と云は
是なり　強て南國の山中にみるは皆此狗の志黒
なるものなり　其他日光山にあるは小狗なり　又波蘿
は山中にもその夢を受く又信州戸隠は茂林の
中にても其形を見る先年又江戸同黒鶴の時
秋發にて得るものあり　是は乃チ秋渡りは大狗の
鳥なりと云ふ形状全く頰白に似て頭及頰は

色ニ深黄ありて見事なり高く頭を立事頭
ハ此よりも細く腹ハ黒く足も猶大ニ黒き斑あり
飼法頬白ニ同し 動餌ハ摺粟ニてよし 浴り
籠飼ニ付るなり

嶋頬白

奥州南部ニある又薩州の山河とふ處ニ常ニ
ある事あり予先年此地ニ遊て親しく見なる
に南部の種ハ見る事なし又因州伊州之産物の
温泉ある山中ニみる事あり此者ハ頬白ニして
目の邊も頬白の如し頭上ニ白筋三筋ありて
色の至美なりとれ至愚ハ来く少とれ定て深山頬白
と同様なり常の頬白の下くにあらず

飼法頬白ニ同し 動餌ハ摺粟ニて 附に浴ニ出
飼ニ付るなり

頬赤 一名アカヒトヽ 州九

諸州ニ有り 広野林中ニ見る事あり 冥ニ来りとる
小金原ニ常ニみる 西土ニてハ紀州の大津より
阿蘇山へ出る左右の原野ニ多し 又當所の産
山の茂林ニ至て夏を吟く秋ニ出る粟林圃中ニ
来る 至形状頬白ニ同しくて面頬赤く猶少し
異なるハ胸ニ志るすれども十羽ニ一二羽ハ至中ニ少しハ
斑点の見る所乃千許の斑なり見る事なる也
或ハ頬白頭白なれども至鶉ハ浅深ハ頬白に
似し至る性質ニ比されハ劣りて下品なれハ飼法

頰白に相同し

深山松蟲 一

西土の深山に出る其形状合々頰白の雌に相同して
両方眉は白く長々きのたりとして頰白の雌は
ことくにあらず只背の様子は頰白によく似てかし
黒ミ帰り同法深山頰白小相同し

頭高 一名 カシラ遠州

詩ハ共に秋に至て人里に移り来る是に至て
深山方中に住む陰地は変に就て学実を食ふ
其形状頰白に相似て短く後白し狗黒ミ帰り跡の
毛を高く立ツ故に跡高と云山中にて年を経る
時は跡より眉は形頰白に至し秋多く取る中に

これ帰り是を本成頭と云是も大狗小狗とて狗は
至て黒きをよしとす秋多く取りて大狗を捕ひ一ヶ
毎を経る時は跡乃チ黒く頰白のかくなりて深山跡也
なるこれ能く鳴る物り人多くは一物ならるを志らず
深山は前に深山なりと云志れども秋多く移り来る
雖自然の深山跡は高々希なり年を経て深山に
なる事もあらず其年は雛に乃チ深山跡あり高々は
皆深山跡にあらず秋取りて早く豊洞に付て時々
水浴する時は早く則むなり豊洞にて喜まて喜ぶ
とくとも深則みなるしこれも自然と聲のある程
ゆり声は低きなり声は高きは高々西白し同法
今々頰白に相同し

嶋頭

[illegible]ともに小希に来る其形状一枝にして只頭上
雪白なる故にこれ変して白きにあらず此一種
也と云へたり

白頭

[illegible]ともに小秋来れ中に今才今白なる故取る
志れども雪白ハ希なり皆中白と云へし先年
[illegible]水府乃小々に来る雪中に池に飛て浴ふ
乃千貫雪と同色なり凡二百羽なと羣来ル
只此一羽なり

蒿雀 本草拾遺 一名草雀 二才圖繪 黄雀 清俗

和名 アヲシト、西土 アヲシ 東国

和俗鵐の字を用ゆ字出小鵐音巫雀属と云へ故に
用ひ来る医家是を焼て血を治る薬とす毎秋彼岸の
比より里に出る夏月ハ深山の冷氣の変に棲む相州
箱根山乃嶺上の竹叢の中又日光山の林中に見る
事なり冬に至るハ返て見る事なし二三月に
能く囀る五月に入て止む其形頰白に似て復黄嘴
の色黒し菜山本草訪説に云く其大サ雀の如し
菜褐色にして豚色を帯ふ黒斑あり和方に多く
用ゆ血を止め及眼薬に用ゆ羽と猫とを去て焼灰
にして用ゆ

本草拾遺曰藏器曰蒿雀似雀青黒色在蒿間
塞外弥多食之美於諸雀又曰食之益陽道補

精髓 此説をみるに血症の調ふ事明し 益陽道と
此時ハ雀と効相同し
三才圖繪曰蒿雀身微緑色俗謂草雀也 此説
蒿々的當ハ夏月蒿ふるハ蒿同にして明ふし

黒鵐（クロジ） 一名クロシト、
諸州共に秋草蒿と一同に来る事ありて形ハ
相同して只色煤黒きのミその嘴も草蒿に相同し
秋ハ多く取て蒿同に附て蒿ふへし 同法頭白の如し

小黒鵐
諸州共に秋草蒿の中に雜りまゐる事ありて黒鵐より
小なるのミ其嘴も細し 黒鵐より希に渡まる故
蒿ひていこれを蒿とし此其嘴も大黒鵐に相

似たり

嶋鵐
南方の諸島に出る先年水府の中湊の邊にて
得るものあり 往々其説を少々に伊ル南國の地方
小出る事疑ひ明し其形今々草蒿なり只其後
高々黄なり 頭面頬尤黄色多し 尾も少し
長き似にて一體黄音高々高し 頬白なり 又
此其へき容像にあらはれたるなり 希なるを以て
其價も尤も高し其嘴草蒿小同して声高し
和鳥の中これ等を最上とし 此也

野地子
諸州共に秋に至て多く出る江戸にてハ夏月岩畧

此中に来て龍鳴ひ薩州にてハ秋霖の熟しらさ府
解来て粟に付く鳥を綱して一時に数十頭を捕る
其中にてハ容ち大に羽に光沢ある見事なる代抜て
長岡に付け久しして別流さるに至てハ夏月の暑の
夜月の明なるに於して簷下に然れハ月に鳴して
其鳴く事白日の如し深更に至て粟盛に其声
高し好く同心者ハ毎朝市中を徘徊して二ツの
声を聞き相争て相求む其價財の高くし鳥を
以て其鳴を相闘しむ猪頭を決せ其声の宜しき
に至てハ家財を市て其鳴を求む乃チ座上にて豊
眉鳴を以てかハしめて其会を擲かし何國も
同じ如此此戯ハある事なり弔か此月下に来て親々
関しして今鳥を人に給るに人曾て信ずるものの
なし其形状全く頬白に似て頗る小に色清稜
高く黄なる其種に依りて紫の本黒毛なるあり毛を
雑て此黒毛なる物あり其鳴ハ種々あり頬白のことく
路を越るもの尤もよし東部の養鳥家にハ日光
山の邊及上州妙義山乃邊より取て来る乃チ
粟を食しむ後長岡に付て其に至て其声と
出ひ又毯を雑れハ後の黄色去りて清白になりて
見事なしひ同法頬白小相同し

嶋野地子

薩州の山河と云処に出る鳥も何の地方に産
するや只秋に至て来るのミ宮て上毛方藤球の

地方の産なるべし其他多く事を知らず
詳にきかれ其形状即地子に相同して唯
思ひ得る所より尾に至て黒色なり後ハ深黄
其声も即地子に同して少し異なる事あり
甲先年仙産の石巻にて此声を聞く土人に
問ひ尋ぬに此地より金華山の南の岸例に
産ひ其の聲を聞く往々聞く事あり志かれども
其の形質ハ見る事ハ得ず云今小人に能く但
其の即地子の声の異なる物にも説しく其形質を
みるにあらざれハ必ず其の岸例に捜ひと決し
かたし同法即地子に同して強し

岩雀

西土乃深山に産す人里にも帝に渡り来る乃チ
猿子の如し少く赤ひ得り同法も亦猿子に相同し

濱雀　一名

諸州共にこれあり其の形状雀に似て頭ハ青緑
色にして尾短く足ハ頬白の如し飼法も亦
数同にて久々同ふ居し

大珠林　一名十ヘカフリ西土方言

諸州ともに帝に見る事あり先年築波山乃叢
中にみる事あり又水府の青柳と云雪の蘆萩
の中に多し甲此叢中ハ多く夏月ハ
山中に入て巣を作る乃チ蒿雀の如し雛とり
同ふらきハ能く轉家其の形状深山頬白に似て

至て小物の強身柿色小にして頭上に黒毛成雜て
淡黒なり人養て一筵を遮ると鳴ハ此頭上の色
深黒と成る是故小鵲破の名あり高く見事之
山野に在て筵を遮ると雖も其黒かるに殺度
筵を強て少し黒ミ増そのミ乃チ個々頭上此
黒物る物ハ頭高突厥雀の類なり其鳴ハ草雀
深山頬白の類此にして夏月ハ毎朝声あり飼法
貴飼にて頬白の如し新鳴ハ梁霊なり

小珠林　一名

諸州共に希に出るなり水府の小郷の奈阿河の
水楊の間小鵲鳴き土人つれして東都に出る
飼鳴家にて皆貴飼に附て鬻くその形状乃チ
大珠林に相似て少しく小物も羽色も少し英
彩ありけれも一度筵を強ると鳴ハ頭上其黒に
なる名付て鵲破と云大珠林に相同し夏月ハ
朝小鳴るなり太和本草に云く小鳴也頭黒く頭
此中に少し白毛あり身此毛ハ淡赤しとあり
飼法大珠林及野地子此類の如し

小楊　一名ヨシクヽリ

諸州に出て多くハ鳥の潮来（イタコ）の鳥より廉鳥
鳥の蘆荻の間に棲む又同州三ツ又の河鳥此
所楊の叢中に鵲楊きるを形状全く
大珠林に似て少し大に平ミあり又天鶴此頭小
似て狗ハ小珠林の如し尤も美色なり これ乃チ

頬赤は頬にをして其叢中に出て上下へ飛揚し
左右前後將迎して云々俗土人蘆潛と云ハ此鳥之

金腹

唐土の書に未だみ先年河藥陀人持來る
志られども阿藥陀人ハ廣東及諸方を交易し
て買入る故に何國は産たる事を詳に決しかたし
阿藥陀の産にハあらず其形全く瑠璃の様にして
胸方栗色に黒ミ有り黄ハ白く青ミ有りて鐵石の
色の如し都て此黄は色を銅鳥家にウルミ黄と云
足ハ頬白のとし銅法十姉妹のとく黍を食ふ
取り栗ハ食せず

朱砂鳥

本名未だ正しからず只その色に因て名付たる事
其大サ黒蒿雀のとし其形も色も亦々相同し
只頭の上に白き筋二筋有り又目は両傍の上下に
白き筋有りて肩に白き羽五六枚ありて少し
珠林は背に似たり頬白にも亦々相類ある足は
茅潛過に出し銅法十姉妹に同し霊にて明に
取り又表銅なれハ三分の銅にてよし

茅潛過　一名ヲヽサヽイ

先年郡州那須の原にて多くみる又同く作山及
大田原の廣郡に多し西北にて犯前は郡茂乃
山林の中に多し其他諸處の山原にてまゝみる事
有り其形状全く黒鶏に相同して目の所平たく

眼色さらどく光ハ觜も細く長く物なれば觜の如し
喜に至て囀ハ乃チ佐々伊のことし高く聽ふたん
たり毎秋日光山の邊より至て江戸に出る路ハ
荻子にて湖ふなり後に喜鵲に付て其所以
剖葦 爾雅 一名
和名 コヨシ
西土にハ至て希なり常州の地方高く多し平
往年本所一目橋より常州の潮東へ行く千間
晝夜左右の蘆荻の中に囀る乃チ幾しも曉
氣成破て却てその声を喋しとれば此多く鳴く
愛なし先年奥州の白川の封内を採菜する
時東西南北皆順材さるにその声のなき愛なし

其中尤も多きハ冥山より黒羽の邊に行る者
形状大蘆に似て大サ鶯のことし觜も細く常に
蘆の波の中の蕊を取り食ふ三月より六月まで
囀る土用に入て至て清く音高く頗る天鶏の声に
至し氏鳴鳴の中ゆ此声高く晝夜我別度
囀るものなし籠中にて此囀るや未だ即中に
囀るかことを嘆ひ毎年四月の時ハ老分の邊ハ
巣児を江戸へ出ひこれを湖ふ小鶯と一様なれども
秋より冬月に入て高く湖ハ加へし多くハ極寒の
時を過る事なし其寒中ハ火辛を加て喰ひ
火辛強き時ハ忽然として死す
字彙曰鷦鷯似雀青斑長尾好剖葦皮食其

中典故名剖葦　此説ハ此コヨシを指して鷦鷯とし
実ハ十姉妹ハ鷦鷯なり悉しくハ十姉妹の下に
辨る尾分君山の本草正誤小剖葦を蒼とするハ
大に誤りなり
本草綱目曰又一種鷦鷯亦雅謂之剖葦似
雀而青灰斑色長尾好食葦蠹亦鷦類也

雪下

西土にハ日州高岡此邊に帝にんゑ事あり又
四國の地方にてハ象頭山の邊に其声を吹く其
他豫州稔山の邊にみる事あり或ハ亦帝に里に
渡来る三部にハ養鳥家にみるより外更になし
其形即地子より小にして熱対柿色なり淡黒此

微黒あり小葦第潜過の一類なり飼法もまたお
同しこれとも夏月ハ暑を畏る故に強き
飼にて飼ふ事し

先入

九州の地方に帝にんゑ又相州最上此邊より
仙臺此笹谷峠の邊にて住くみる其形状第
潜過に似て尾長く長くんてゆなり又大坂の養鳥
家に帝に出る事て弱き鳥なり多くハ毬の中に
死其事あり蒼の如く飼てすし尤も其に付て
飼に加減其一し飼此強きもまたあし、所を
給ひるも天竜の能き喧なる日を捨て給せされハ
所にあたりて死其事あり

河淡鳥

先年唐船載来る是大サ文鳥ことく背は黒白彼ハ雪白にして尤も見事なり個法黍にて十姉妹の如くし時々青菜及蕪菁を与ふ是し

文鳥

往々海船載来る是ハ彼の地乃産にして一種大形なり日本にて産しなるハ皆小ぬりなり是價も来る高直なり是尾羽の色光潤も雖小黄ハし是これ風土のしからしむる故なり乃チ文鳥とて来る故に今通して此名を称せしむ其出籠に於て文鳥の名及形状を説ふる故ハ是大サ頬白より大にして強剛深淵色に赤頬面て雪白なる事頗る四十雀に似たり迴轉の間も鳴て高々愛らし先年ハ長崎にて殖し法方へ出し是年ハ備前の児島郡の林村の佐藤九郎次なるものの畫く巧者にて数百羽を籠にして大坂及江戸へ出し是に因て諸方尤多し皆此者の庭籠より出てたるなり是菓を作らしむ法ハ先雌雄共に若き鳥を捕ひ雌雄お中々能く和合してむつましきを三二月より比より庭籠に入て自分よりして菓草を引しむ自然と巣洞て卵を産す雌雄共に伏して穀を如に能起其鳥ハ一架に四五羽に

至る其雛自ラ口を開て人の指ならば開を啓ハ
然る其雛を皆取上ゝ指開にて啓ふ事ハ
雛黄に生菜を搦りて粟（キミノコ）粉と相合て啓開ハ
如くして啓ふなり成長するに隨て粟を啓ふ之
乃チ庭筵に至る時ハその親の啓にて無なり成長
其取り上ゝれハ又菜草を引て同ゝ卵を生ハ
凡取り上ゝれハ二番児三番児にて孕ハ故に至る
これにて高々殖へ易し此鳥高々所を好む
一日に二度も三度も清所を代て与ふれハ歳度も
水を浴して其尾羽の光沢至て美しくなる所
所に因りて所あしけれハその光沢高々宜しからハ
所を好味して能洗浄て所きんよくなれハ又
事に能る物なりこれ乃チ文鳥を開ふ幾一の秘傳
形り

頬黒

毎年多く文鳥我殖せハ其中に自然と頬の黒き
物変して有るなり尤も雛の中ハ其頬皆黒し
一度毯を通て頬白く雪白になる此頬黒ハ毯我
殖て愈黒黒になるを頬黒と云白に此れハ尤も
下品なり其れとも多き中にハ一羽二羽ハ又
見ゆるかしハ凡雌雄此等ニかゝる相物ハ文鳥已来
とも頭を附て啓ハ雄なり頭なきハ必ず雌なり
宜しからし是我真船の人に尋るに自然と頬
黒も出る事なり山野の自然生此鳥に此頬黒は

皆水性此志しもしる如なりと云

容蕤 中山傳信録

和名 ウソ

諸鳥ともに深山の産なり秋に至て人家の邊に来る亦江戸を左にハ秋遅く来る他鳥にて秋初に出る其雛より蓋て純く人に別染し産に鳴く事嘯かぬし故に名付き形状惣て文字小似て頭黒く頬赤背ハ黒く光る人よく蓋ふ

茶子小て同ふ

中山傳信録曰容蕤翅灰褐色黒頭八月來

大嘯

日光山より秋深して江戸に渡来る事あり其形状未同して頗る大なるのゝ

黒嘯

秋に至て一同小雀来る乃産此嘯の雌なり

これにも大嘯あり

頬赤

秋群来る中にあり熟稱亦照りあるて頬の毛至て赤きのゝ蓋鳥家に定義照嘯と云

是形り太和本草に雄を照嘯と云雌を尾嘯と云

鳩 鉄厓集 一名黄梅鳥 清朝俗名

和名 ワウバイテウ 和漢通名

南方の島より来る物なり其大サ伯勞に似て

容貌ハ蒿雀ニ如し 狩ハ有雀の如く 涂黄に段の
上深黒なり 足稍ハ頬白に如し 此雌ハ少し小に
して黒なし 唐土の出籍に於て未だ考ふつき
所し 案るに楊廉夫鐵厓集曰鳩出蘄州 薏
梅山中と云れハ鳩と名付も亦當れり 志るれ
とも此説をみて名付るに所し 閑法ハ案まで
よし 又長閑なるハ三分にて頬白の類のことし

以伊智伊

先年琉球人福州の地方より求免まるこれ多
元来ハ番鳥なり 其大サ噪林鳥に如く毛色蒿
雀に相似て黒に所し 足ハ頬白に似て高し 其鳴
事 此伊智伊と云ふ如し 本名未だ何れ出籍にも
考なし 閑法十姉妹の類に同し 雌雄所ハ雛を
かき屋き多く所り

交喙 農田餘話 一名鐵觜 三才圖繪

和名 イスカ

法師芳に秋渡来る享和元年予水府に在り 此年
家に多く渡来るなる人云く十二年 前多く来る
其後ハ至て希なり 今年の如く多く来るを
所しと云 或ハ亦南方の諸島より来るなりと云
本朝食鑑に云く 状大サ鶇に如くして 頭背蒼赤
復稍尤も赤紫色 觜蒼して左右に齟齬して
てこれを所に俗に云 世に相違ふ者を伊須加に
觜の如しと云ハ是れなり 荘子 狸子を食ふ

最妙なり其味稍筐と云式ハ六〻世俗云く其一觜
上下左右小曲ル上の十五日小ハ右に曲ル下の十五日ハ左
曲る互小お代て お曲ると云傳へたるハ高く誤りなり
弔も是我宮に試るに此事なし志れども觜の
左右小曲るハ亦く珍き觜なり亦に類なき事と云
一

農田餘話曰

青伊須加

秋に至て多く群来る其中に至て照て見る我照伊
須加と云是我國に一ひ毬をたれハ青伊須加と
なる人多く伊須加の雌なりと云雌小ハあらぬ

島伊須加

秋一同に群来る其中に帝にあり雌雄ともに其の
伊須加小お同して眉に白毛の毛ガしあり只これ
のミ異なりとは是れハ鹿間にて明の通し

白啄鳥 陸詞切韻 一名鴿 同上

和名シメ ヒメ 漢語抄

毎秋渡来る是れを本ト南嶋の産物と云を年ハ
夏月も江戸の諸山にあるなり是れ人の籠より
出てたるれ捕てゐるに皆籠貫なり本朝食鑑
曰鵤に似て稍大頭復黄白黄斑あり觜大短して
白背尾紫黑の上黒下黒く白羽を挟び脛掌微黄
常に山林に棲む綱して是我捕ふ味倶略鵤小同
と云漢語 小言く比丈又比米と訓ゝ又鵤の字ハ

シメと訓ずる然るに字彙及孫愐切韻鵲音皆
小音雀也とあり果してシメにも當てかゝし又君山
本草正偽小三才圖繪ハ鐵觜ハシメと訓するハ誤なり
鐵觜ハ伊須加なり陸詞切韻曰鴿音黔又音琴白啄
鳥也此説是ハ得たり

蠟嘴南産志 一名竊脂爾雅 青雀郭璞 蠟觜雀 青嘴鳥卓氏藻林

桑鳸詩経

和名 イカルカ古名 イカルカ戸 マメクチ仙臺 マメマハシ マメドリ

エクヰ薩州方言

詩ハ共に秋渡来る或ハ云南方ハ詩鳥よりまゝ
と云日本の海邊及山中も亦尤に棲む山雀なり
てハ多く糖ムクエノキ菓樹ハ実を食ふ故にエクヰと云その形

白啄鳥に似て大にして觜も相似て黄色なりこれ
本ト和名に那ハ故て漢倉の風深ありて書て
能く別深き葉山ハ本草譯説に云く深山にハ
春夏ハ間渡て市中に出川モヅの大サのごとし
合身灰色首黒色にして巾ハ紅なるかゝし羽の先
黒色にして茶褐色を帯尾黄赤褐色紅赤し
嘴巨にして曲まりて黄色黄ハ案りたるハ五穀を
食ハ春月囀る声清し月日星と鳴も得りなり
俗に三光鳥と称す冬秋月山中に月日星と鳴
そのハ山鶯なり是和名の山鶯なりこれも三光鳥
と云ふ鳴く事物を精迫するに似たり故に
[illegible]のてゝ[illegible]麻子莚子にて明に[illegible]

詩經曰文桑扈有鶯其羽

陸機詩疏曰桑扈青雀也好竊人脯肉脂及膏故曰

竊脂

本草綱目曰桑扈乃扈之在桑間者其觜或淡白如

脂或凝黃如蠟故古名竊脂俗名蠟觜淺色曰竊又

曰扈鳥虔〻山林有之大如鴝鵒蒼褐色有黃斑點

好食粟稻又曰其觜啄微曲而厚壯光瑩或淺黃淺

白或淺青淺黑或淺玄淺丹扈類有九種皆以喙色

故声音別之非謂毛色也細ニ此説を考るにその觜

淺白め指と云ハシメ我指して云ふ凝黃如蠟ハイカル

微曲而厚壯光瑩ハイスカなり又淺青淺黑淺玄ハウツ

此類淺丹ハ久多れ見九種とこれハ此類なり

閩書南産志曰蠟嘴其喙黃

阜氏藻林曰竊脂也俗呼青觜

淮南府志曰嘴嘴不祥其名但口黃為人（此下有缺文乎）

典籍便覽曰桑扈怨鳥麥熟時候鳴不分晝夜九

扈中亦有桑扈此説の然多ハ桑扈ハ杜鵑之九扈の

中の桑扈ハ蠟脂なり可見古人の云説々如此能々

細く味ニ是我解ましてあらされハ云ふして自々

誤る事なり

鳥蠟脂 一名小イカル

西土にハ八六鷄の邊より渡来る秋深して蠟脂と

離り帝にあり其ハ小國に来る事なし故

蠟脂なり ソレ〻ハ小イカルの名ハ子ニ皆

相似ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]

飼籠鳥巻之十一終

飼籠鳥黄鳥部目録第十二巻

滕成裕曰黄鳥練鵲の類ニ分其名字を識して其産
我畜ふ者あるにかし黄鳥ハ古今の典籍に[illegible]
ウグヒスに[illegible]ゝ[illegible]ゝ知り練鵲ハ形質を見て疑我
画圖に求む是其一識を発するも亦ゝ宜なる哉世の
丹生家其ゝ能く此説を明辨して意得たるし

黄鳥（カラウノイス）詩經　畫眉鳥（リビテウ）閑鑑類函　鉤割雀（ヨキリ）廣州府志
戴勝（ヒレンシヤク）肇慶府志　黄戴勝（キンシヤク）　鶻嘲（アカナキトリ）水都賦
白頭翁（ハクトウヨウ）閑鑑類函　白翁　鴨鶋（ヒヨトリ）爾雅註
磯鴨鶋（イソツグ）　島鴨鶋　鶇（ツグミ）テウマ
黒鶇（クロミヘヒ）　眉白鶇（クロシナヒ）　白鶇（シロシナヒ）
赤鶇（アカツハラ）シナヒ　眉白（マミシロナヘ）　茶鶇（チヤジナヘ）
蒼鶇（アヲシナヘ）　八色鶇（アカタシナ）　八丈鶇
麻雞（トラツク）ヨニツク楊州府志　鷓鴣（シヤコ）古今注　長吻鵲（坤輿外紀）

二十四品

飼籠鳥黄鳥部目録　終

飼籠鳥卷之十二

黄鳥部　二十四種

黄鳥詩經　一名黄鸝說文　黧黄爾雅　商庚同上　青鳥左傳　鸝庚典籍便覽
栗留事物異名　天女瑯琊代醉　愁胡名物法言　皇黄典籍便覽　黄鸎同上　黄鴦事物異名
黄公同上　黄袍陸機　黄鸝鶹同上　黄伯勞同上　黄流離典籍便覽　賡詩及花鳥爭奇
黄雀盛京通志　黄栗留禽經註　摶黍陸機詩疏　楚雀同上　金衣公子天寶遺事　鸎禽經
倉庚月令　鶯鳥禽經　黄匡漳州府志

和名　カラウクヒス　カウライウクヒス

朝鮮の釜山浦にて希小みる事ありと云なる此名を
得る又琉球人云く福州の地方より秋を以て渡せ
来る志ありしとも喬木の梢に集て補る事あるとは
其語復て彼の地方に皈ると云先年薩州の山崎と

云変にて用ニ着ゆり又本朝食鑑に云く往年豫州
大津の山中に得る雌なりしかして早く死すと云ふ
地方にハ時にして南方より渡来ると云江戸秋月候
此庭籠に畜ふものゆり後又薩州侯に贈る志かれ
とも雄にして雌なし遂に殖る事を得ず而嘗
て是を圖せ形状日本の鶯と大に異なり古人
鶯をいふ黄鳥に當る事久し今又是を得ぬ故し
其大サ鶴雀のゆく金才黄褐にして咽より目の上
下に眉のゆく濃黄なり本朝食鑑に云く黄色なる
故に金衣黄袍の名あり羽及尾に黒色を有雜
あり尖觜紅掌を時中華より来る宦家なれを
樊籠に得ると云春に至て種々の声を出し圓滑にして

言ふ事に堪ふ其羽法黒鶫に相同し

詩經曰有鶯其羽

月令曰仲春倉庚鳴

說文曰倉庚鳴則蠶生冬月則藏蟄入田塘中以
泥自裹如卵至春始出

本草綱目曰鸎處二有之大於鸜鵒雌雄雙飛体毛
黄色羽及尾有黒色相間黒眉尖觜青脚立春後
即鳴麥黄椹熟時尤甚其音圓滑如織機聲乃應
節趨時之鳥也此說ゆゑ能く形容を体毛と
云ハ翼のかをいふ之

鉛山縣志曰鶯即鶬鶊也一種又名黄鸝黄鸝ハ鶯
の一種の名にて是れ亦ゆゑ吳說なり

漳州府志曰黄匡興化志曰似鳥畧小首尾黒而翅黄

畫眉鳥 淵鑑類函 一名

和名 ガヒテウ 和漢通名

和産なし物品目録小類白小鶯ハ大ニ誤なり往々海舶載来る是大サ文鳥より大小して毛色ハ相思鳥に相似たり目の上に淡白の畫眉あり背ハ黒く其し尾も短く春に至て聲を出し圓滑小を尽く空てよし其れも相思のことく雛を爲す東都の雲鳥家に希に出す明法ハ相思鳥のことし相思鳥より強き鳥なり

肇慶府志曰畫眉身黄類雀而大眉白毛一縷如畫善鬪游間者焚籠畜之以角勝負 焚籠ハ籠ヤコなり

漳州府志曰畫眉通志曰白眉褐質好鬪善鳴泉人以鬪賭亦興化志曰聲似鶯而小亦清圓可聽

杭州府志曰画眉土人籠畜之携至山林與群画眉調舌為戯

松溪縣志曰画眉聲如鸎之圓滑

閩書南産志曰畫眉白眉褐質好鬪善鳴泉人以鬪賭金 已上の諸説白眉と云に因て類鳥當ッ非なり

淵鑑類函曰畫眉以鶯而小黄黒色其眉如畫巧作千聲如百舌

鉤割雀 廉州府志 一名雉割雀 臨高縣志

和名 ヨンキノ江戸 ヨミハラスヽメ 同上 キチカウチ 越後 ギヨヽシ 筑前 サラ 同上

ムキウレシ 同ヘシ若 上州

薩州ニ更ニ稀し 関巳東ニハ至て多し 其乃大サ
伯労のごとく背上灰黒ニ腹下白し 冬月ニハ至ず春
なし 夏至の日より聲を出し大和本草に云ごとく
キヨ〻シと云ふに似たり 麦熟する時ニ鳴て昼夜不止
高く噪し 又大和本草記聞ニ云ふ大サ嘯の如く背ハ
鶯に似て腹ハ白し 尾長しと云 五月の末蘆叢の
中に蘆葉を集て巣を作る 一巣に雛五ッあり 巣を
立て親ニ随て蘆荻の間ニ飛遊ぶ時先ッ其
雛を捕て鼻ハ云ふ馬尾を以て細き竿の先ニ
結付て其竿に黐を塗りて其雛多き処へ出せハ
先ッ其親ハ直に其竿ニ止り付て黐にて其雛も逃ずに
皆竿に著く 一竿に二ッも三ッも一度ニ黐着たるを取
蘆切と云 此雛を飼に尾し 飼法七分ハ鶯飼ふて
鶯の如し 冬ニ至るハ摺餌にて飼ハ 夜ニ至てハ
十一月の比より正月の比までも聲を出し高く囀
甚た宜し 扨薩州の地ニ更ニなき故ニ江戸ニハ多く
飼ふ 此雛く別深ニ至る 折ニあて飼ハと難九月の
比より急ニ倒て死する是れ風土の違ひし故なり
冬月ハ何の変ニ至るや 常に陰なる処へ置へし
元来事なし 杜鵑のごとく蟄すること若し
及松岡氏の筆 是乃剥葦と名る 脱ちり 広大和本草
に百舌鳥ニ当てるも云ひ誤り
廣州府志曰 鉤割雀 四五月夜半飛叫 若云鉤割

年必豊鉤割必歎

臨高縣志曰雉割雀白晝不見形狀惟春夜飛鳴
向曰割〻割歳必豊 千年常陸へ舟行して晝夜
左右の蘆叢に呼事夥し是に依て此說に合る
事なり

戴勝 肇慶府志 一名冠鬠 同上 釘鬠鸕 同上

和名 ヒレンシヤク

諸州共に是れあり多くハ春に至て渡り来る又ハ
秋月出る其形狀嘴に赤似て短く羽青緑色同の
色及び候下に至て黒色なり頭の上に冠あり大和本草ニ
云く雨鳩ハ羽に白き羽莫の先に一点の微あり
腹ハ淡灰色大和本草記聞ニ云く相似て綠ニ赤点あり

老鳥ハ至て黄し是故に鍬レンシヤクと云若鳥を
黄鷄故に黄レンシヤクと云此說誤り也老若に
あらず自ら一種あり其聲ハ聞に随へハ囀る
類に同し夏に至て羽離れ去る所羽毛
新にして腐れたると云ものハ羽離れある事なり
とおもふへし

肇慶府志曰戴勝陽江謂之釘鬠鸕高要高明謂之
冠鬠大如鸜鵒而色灰綠鸕有鬠高六七分兔有紅
毛性善馴依人 此說ハ鍬レンシヤクなり故に尾に紅色
あり

黄戴勝（キレンジヤク）

諸州共に秋より春に至るまて鍬レンシヤクと一同り

雜来る日光山より出るハ此黄なり其形状一様にして
尾端黄色なるを或異とし人多く緋を貴て黄を好き
蘭山本草譯説に一種日本にレンシヤクと呼ぶ何ゝ
尾短く鵙より小なり風切り羽赤色あり和も懶き
黄色にして老れハ和なりと云此説誤なり和黄ハ老
若にあらず各別に一種なり

鶻嘲 東都賦 一名鶻鵃 爾雅 鶻鳩 左傳 屈鳩 爾雅 鷽鳩 阿鵴 雜俎

鷓鴣 本草綱目

和名

先輩 アサナキトリを訓ずるハ非なり和産ある事なし
先年薩州に出て琉球人福州より真産の圖を持
来るをみるに戴傍に類して黒質なり

本草綱目曰禹錫曰鶻嘲南北總有似山鵲而小短
尾有青毛冠多聲青黒色在深林間飛翔不遠北人
呼為鷓鴣鳥時珍曰此鳥春來秋去好食桑椹易醉
而性淫其目似鶻其形似鷽〻山鵲也其声啁嘲
杭州府志曰鶻鷹属春來冬去短尾青黒色多声
此説多声と云ときハ鷹鶻の鶻に似たり

白頭翁 洲鑑類函 一名白頭公 江州府志

和名 ハクトウヲウ 和漢通名

唐舶往〻載来る其形状鶻鵃のぬくして少し短く
背上黒色に後下白し頭上白毛あり是故に其名
あり乃ち是れも亦々畫眉鳥の一類なり同法も亦
可知にて畫眉と一様なり

調鑑類函曰鳥有名白頭翁者形似鸜鵒其飛
似燕之頡頏頭上有白毛身蒼色
大灣府志曰白頭翁似雀而大頭有白点故名
漳州府志曰白頭翁似雀而大頭有點
杭州府志曰白頭翁褐色頭有白點
含山縣志曰白頭翁首有白毛偶飛家園亦能
窺窠語

白翁 一名

和名未詳
唐船ニ持来る也形状白頭翁ニ相同しても
白き毛多し白頭翁ニ比すれハ少し小形なり
鳴法も白頭翁ニ相同し

鵯鶋 爾雅註 一名鵯 同上 鸒 同上 鸒鶋 同上
和名 ヒエドリ 本朝食鑑 ヒヨドリ
諸国共ニ常ニ群飛也秋より冬ニ至てハ人家
庭際の樹実を食ふ也大サ鸜鵒のごとく少し長く
長し全身灰黒小黒斑あり嘴黒く老し足も
黒し声常ニ飛鳴して清滑なり樹林の間に
巣を作る也雛を取て養ふ時ハ甚よく人ニ馴て至
能鳴も多く諸鳥の声を学て甚面白し
爾雅注曰鵯一名鸒音激一名鵯鶋一名鸒鶋小名
鸒鶋小而多群腹下白者江東呼為鵯鵯鳥又状
似小鳥而蒼灰色頭上毛亂起眼邊有微赤色胸
臆灰青腹下灰白俱有黒斑背刹而黒脛掌亦蒼

黒常成群飛集啼叫喧噪然不悪食惟貪樹草
此説を案るに ヒヨトリハ鴨鸒と云意也
源順和名鈔曰雀禹錫食経曰鴨音卑貌似鳥
而色蒼白者也といふこの説に因て本朝食際
鴨の字を比衣土里と訓するハ今の比與止利と云
是ハ爾雅注の形状に據しなり鴨鵶ハ本と燕鳥の一名
那り鸒斯の下に詳す

磯鴨鵶 一名イソツグ

諸鳥共に海岸に棲む薩鳥に磯と云所に多し
又東海道大磯の邊に棲む又水府の荒磯と云
所に来る事なり其大サも状も鴨鵶に相同して只
首より脊の通りに至るまで瑠璃色なり後ハ赤く
斑なり雌ハ斑なきのみし觜も足も鴨鵶に相同し
て紫黒なり其声至て清滑に少し塩へたり胴
法ハ六分七分にてよし夏月ハ折々水を浴て
冬月ハ空を恐る時々日光に出し暖む是し
正二月の比より声を出す雛より胴に時ハ其声を
更し

嶋鴨鵶 一名嶋鴨 本朝食鑑

昔先年長崎に於て此鳥の生圖を出し多くの
華客に見せるに其名を命する者有し又長崎の
老人に少に彼の方より持来る事なし宜て琉球の
詩鳥より渡たる物なるべしと云又琉球にこの鳥
ある事なしと先年上川筑登之の答へあり若しく

唐土にあらハ是乃チ真の白頭翁と云つき物なり
又唐土の西にも更にあるなれハ乃チ南北
諸島の中よりあるものなるつきに疑ひなし先年
おが三浦にて秋に至て南方より五羽連れして
北の方へ渡る我をくゝる人ありて其比新魯も多く
持来て賣る者ありて三十年已来更に新魯なしと
云往年亦水府に行て是我等ハ磯と云所に
大洗ヒ明神の傍に與利幾大明神の前の茶店に
杵屋吉蔵なるものあり弔此家に休息して諸魯の
事我尋るに去年没物して只其婦のこと其て應答
其婦の云く毎秋海上より嶋鴨鷸一ツ二ツ来る主夫
竊に捕へとも決して其間に付く事なし志れとも

を年ハ多くハ来る事なしと云是虚語にあらハ
實を告るに似たり又豆州の山人に諸魯此事を尋
に更に奇島をみる事なし舟にて諸島を回れ
首白して才其黒の島大島より八丈嶋の魯に帯
みる事ありと云案るに是乃チ嶋鴨鷸なるべし其
形状鴨鷸に同して首ハ白く雪のめし才ハ黒く
漆のごとく觜足至て黄赤なる是中魯の第一と
其屋しき声も鴨鷸に似て清滑なり其巣我作る
しむるに其先雌雄共に若き魯を擇て二月彼岸の
比庭籠に移し自然と巣草を引せて巣筐の中に
作る雛となりたる時に蜘蛛二三十疋を一日に食ひ
日を追て六七十に至る針毛を生るに及て早く取

上て喜岡にして喜ふべし早く喜岡に付けされハ
去しては付きかたし海京卯を生して再ひ雛を
取るにより此等今ハ華等此部に入るれども華等
にハあらず嶋等此部に入てしかり本朝食鑑に云
嶋鴨狀鴨に類して頭頭より徑に至て雷白背
翅純黒光あり後灰黒觜種俱に紅聲喧し鴨に
似たり樊中往々留ひ官家之を愛す常に樊籠
に畜ふ或ハ烏鵲を作す亦世蕃國より来る
海洲に是を捕ふ故に嶋鴨と称す志かれども亦
是を詳にせず或ハ白頭翁也此未詳と云此形状
詳に説く故に此に載と又松岡氏櫻桃鳥に當
家ハ非なり

鶇。一名豆久見 漢語抄 烏馬(テウマ) 本朝食鑑 コツコヲ 豆州方言 ツグ

古へより鶇の字を用ひ来る事日久し故に今改め
かたし字書に鶇音東鳥名と訓れハ此等にも當
ることし本朝食鑑に馬鳥を誤て称すハ鳥馬の訛
なりと云漢語抄に豆久見と訓す又馬鳥をも亦
来る出出を志ひ諸州共に秋深して夜渡る来る
夏月にハ深山に入て巣を作る春三月の比より深山
へ帰る奥州甲子山の中にて往々其声を聞く其大サ
鶇の如く首より尾に至るまで黄褐色狐下当し
本朝食鑑に云く伯勞より大小頭背狗徑紫雲
彼黄白紫黄斑あり羽尾黒く觜種蒼く色に山
林に接て往々嘴る性好て螻蛄を食ふと云此説此

ことく二月の比より山林の中にて囀る頻る黒鶇に
お似たり賀茂にては此囀を以て人各爭て求む
嵩ふ其囀に種々ありて價も高く高價に及ぶ
薩州の人の郷地子を お爭て高價を費せり
お似たり

黒鶇　一名　クロミヘラ

詩に芳に深山幽谷に生ず桑に甲子山のものは只
高して太々後下尤も白し日光山より多く江戸に
おゐ日に此霧鶴山紀後の阿蘇山にもあり右泉多
き所に生ずは鳴声尤も高して住なりその容貌
鶇に同して全身漆黒なり狗より尾下に至るまで
雪白なり或は白中に黒点あるあり年を經れば

多くは全白になる事なり嘴及脚足は黄色なり
日光山より雛を取ず是は求めて嵩ふ時は別
深にて久しく閑に塩人なり夏月は時々水を浴
すべし毬に至て尾羽に光潤を生ず閑法鴨鶴の
類のめし其雌は光潤なし

眉白鶇　一名　クロミ十ヒ　山人同名

詩に芳に深山幽谷に產ず秋に至象に雛化る
此めく遠く聽て人倫にある事なし山中にても
雪深く積まれば只其山側にあるのを遠くかけり
かけば此時に至て山人是を網して捕象故に
諸の鶇の中是のみ希なり是を形状全く黒鶇に
類して少し長く其黒も亦々光潤なし両眼の

上に画眉鳥はとく白眉あり其至て白を上品と
次尤も年を経れば白しと雖又別に一種あり
此種も山中にてハ黒志那（クロシナ）比（ヒ）と云ふ沈類皆志那比
なり志那比ハ鷺の字の訓なり字書に知る者與
鶴同とあり此鷺の字を志那比に當る事なし

白鶇（シロツクミ）　一名白志那比

先年日光山より出る鶇才雪白高く珍し
常に変して出る事あり或ハ黒白相間る物あり

赤鶇　一名志那比（本朝食鑑）　赤腹（江戸方言）

諸州共に秋来る春三月山中に鳴る其形状
鶇に似て少し長し首より頬に至るまで黒し
又若きハ赤く黒ミなし背より尾上ハ駒の背は
色に同して少し黒ミあり狗より赤色なり
尾下白く觜黒く足絡ハ蒼し其雌ハ赤ミ形
後も白し三月に至て鳴る其聲鶇はとし
賞すべし夏月ハ深山に鳴て雛を作る所法
貴銅にてよし尤も強く鳥なり久しく飼へば
毬を強て後は色たんしに淡くなる秋新に
捕へた家物に赤ハ秋の新鳥も老鳥に首の
真黒なるハ能く飼ひたりと雖も鳴りあしく
其年の雛鳥を擇て飼ふ在し其ハ[illegible]して
鳴る時ハ深山の趣あり甚く春興の助となる
甲好く毎歳是を捕へて飼ふ或ハ[illegible]里[illegible]
並ぶく時ハ格別品位あり

眉白　一名　マミシロシナヘ

赤鶫ハ毎歳多く来れども此程ハ常にハ来ル事なり文化四年卯十月ハ鶫ハ多し如是来る事前後始て志る是我日光山より来る人に尋るに彼の山中にも多し赤鶫より多く捕へ魚店に鬻くと云毎歳渡来る事也皆如是天地の辛候に因て皆致す所なり其形状全く赤鶫にして両目の上白く眉の如し乃画眉の趣なり案るに觜の細く長き鳥を大小によらず皆白眉なり鶯目細の類皆白眉あるこれに因て考へ志るべし

茶鶫　一名　チヤジナヘ　西土方言

詩に共に赤鶫に交来る惣身茶褐色なり或ハ云く赤鶫の雌なりと云或ハ若鳥なりと云

蒼鶫　一名　アヲシナヘ

蒼鶫は山中に多く見象ハ九月に来る赤鶫の如く してかし其ハなり背青緑色にして後ハ赤こなし又茶の如く白きにあらず是れ亦自一種なり春に至て鳴なり赤鶫に類す

八色鶫　一名　朝鮮鶫　アカタシナ　隅州方言

隅州は須木と云変又小林と云変の両村なり此両村ハ霧島山に至し此山中より秋に至しかると云此村ハ至て奇鳥なり八月の時より村民各し蚯蚓を以て羽翻を拭て捕へ蚯蚓を刻り

割網此上に置て網小付るなりこれを形状噪れ鳥に
ことくして總身五色の色成備少後下より尾
下小至るまで赤し村人是に因て丹下帯と云
村民男子の襁布（ヨヒ）を云丹き襁布を志めて稲
小役下小赤色なり是真産此圖ハ後編にみるべし

八丈鶇 一名島鶇

希に南島より来る是大も形も鶇のことし背ハ
鴨鶏に似て狗ハ黄褐色にて野駒の後此如し
網法鶇より六かし網を強くして冬月ハ喰り
まへし是と八色鶇ハ他所に出る事なし鶇の中此
尤奇鳥形り

麻雞 揚州府志 一名

和名ヨニツク 太和本草 鵁鶄 トラツク 江戸

南方此語島より来る大坂の養鳥家に希に出る
和名抄に鵁ハ唐韻を引て云く鵁ハ怪鳥なりと
云此鳥の形容高く醜き故に兎ツク鵁ツクの名
あるこれ形ハ鶇に似て是大サ鳩よりかしに小なり
惣身黄褐に黄緑乃斑点なり後も白く斑に
緑黒乃色相交て雉の雛に似て是陰大なり
觜ハ黒く長し始まく高し是鶇の中此尤も
大にして下品形る物なり

揚州府志曰出通州秋日來自東海外太者名
麻雞此説皆鶇なり大者ハ麻雞なり

鸕鴣 古今注 一名鴣 物理小識 越雉 禽経 隨陽 同上 逐影 同上 懷南 同上

南客廣東新語 南禽事物異名 内史娜嬛記 花象ケ同上 鉤輒杭州府志 泥滑事物異名
雞頭鶻事物異名 南飛鳥名物法言 隨陽鳥南産志 呼喚女花鳥爭奇
鉤輈格磔嶺表録異 懊惱澤家事物異名
和名シヤマ和漢通名
唐舶往々持来る其大サ鶇のごとく形ハ鶉に似て
樹間に注む鳥なり其色茶褐にして総身黄
白の斑文あり頗る麻雞に似て美なる三四月に
至て聲を出す物を打つことし始て此時ハ高く
奇音なり其時ハ往々養鳥家にも有り蘭山
本草譯説に古へ渡り大る事あり云明法八哥
鳥画眉鳥のことし強き鳥なり
本草綱目曰時珍曰禽経云隨陽越雉也

飛必南翥晋安曰懐南江左曰逐影張華
注云鷓鴣其名自呼飛必南向雖東西回
翔開翅之始必先南翥其志懐南不但北
也孔志約曰鷓鴣生江南形似母鷄鳴云
鉤輈格磔者是有鳥相似不作此鳴者則
非矣頌曰今江西閩廣蜀夔州郡皆有之
形似母鷄頭如鶉臆前有白圓點如眞珠
背毛有紫赤浪文時珍曰鷓鴣性畏霜露
早晩稀出夜栖以木葉蔽身多對啼今俗
謂其鳴曰行不得哥也性好絜獵人因以
糯竿粘之或用媒誘取南人專以炙食充
庖云肉白而脆味勝鷄雉

古今注曰鷓鴣出南方鳴常自呼常向日而飛
畏霜露早晩希出有時夜飛夜飛則以樹葉覆
其背上
南産志曰鷓胡一名越雉又名隨陽鳥南越志
鷓鴣雖東西回翔然開翅之始必先南翥亦胡
馬嘶北之義孟詵曰此鳥迺天地之神每月取
一隻饗至尊自死者不可食也
嶺南雜記曰鷓鴣形雌雞而小雌雄相對啼飛
不甚高嶺南之佳味也
嶺表録異曰鷓鴣呉楚之野悉有嶺南偏多
此鳥肉白而肥遠勝雞雉能解治葛井菌毒
臆前有白圓點背上間紫赤毛其大如野雞
多對鳴南越志云鷓鴣雖東西廻翔然開翅之
始必先南翥其鳴自呼杜薄州又本草云自呼
鈎輈格磔李詳玉山行聞鷓鴣詩云方穿詰曲
崎嶇路又聽鈎輈格磔聲
廣東新語曰飛數必隨月正月一飛而止十二
月則十二飛而止山中人輙以其飛而計月人
間何月矣則云鷓鴣幾飛矣卑暮有霜露則不
飛飛必啣木葉以自蔽霜露微霑其背聲為唖
故性絶畏霜露
長吻鵲 坤輿外紀 一名
番名 ヤールボーゴル
先年阿蘭陀人西洋より[illegible]長崎へ持来る

形状八哥鳥に似て黑し其觜大にして更々
上吻の上に又觜あり高々奇鳥なり是にも乃チ
鵲の一種にをし委細に後編に載せ故に此に
略せなり
坤輿外紀曰長吻鵲伯西爾喜鵲吻長而輕與
身相等空明薄如紙　此説是なり

飼籠鳥巻之十二　終

特
7
71

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71